古今百物語評判　五

へ13
3116
4冊

百物語評判巻之五目録

第一　瘟の神疫病の神付蘄蘄乙の宮の事

第二　蜘蛛の沙汰并王守乙が事

第三　殺生の論付伏犠神農梁武帝の事

第四　龍宮城并山の神付張横渠の事

第五　仙術幻術の事

第六　夢物がたりの事

第七　両愠斎化物の物語の事

第八　而慍齋の事并ニ草紙の外題の事

百物語評判巻之五

第一　痘の神疫病の神付蘄蕭乙の字の事

ある人問て云痘は神疫病の神とてまつる
まざく惡物よばれ侍る又さて病氣の人はくなか
せかくかなるハせるやと問けれバ先生答て
云く痘の神疫病は神ともにあるまし痘瘡
ハいにしへハなし戦国の比より發りけるよし
醫書にみえたり元人は胎内に居しとき
其母のふる血を呑て此身命を長ぜしめて
ほとりし惡血の毒後くハ時の氣にいざなハれ

て発して疱瘡とあらはるゝされバその根ざしハ
胎毒なれども其いづるハ時の気なれバそ
れおのづから疫鬼神ありて疫瘟の神など
まぎらはしきにより世俗にもさまざまの
祭りなども頼くなす理なきにあらず又
疫病の神といふ事を弘しの書にハ上古
の悪王子乃たましゐ此神になりてこの世
に伝へたれども其実の世まてさながら生
と申して自目の前に見えたる事をもはじ
めとして疫病の神ハ時々多く出て気盛へ

後なれバその所に其人死せる念力の生ずる、
と絶ざるは一般も受けるべき故なれバまして
死後に伝ふべき志しもなき亡魂ども猶
おのまり人におそふが故に其怨に崇りあり
いはゆる亡霊といふ事のいかなる其飲食の事にて是又
兵乱の後なども行はるゝ其戦場に多く祟し
魂魄の疫鬼となりたるなるべし其うけたる
人の強弱によりてひとく生死の気をかへたるも
やかくあれども孔子も人の儺をいはれ
たるハ悪鬼をさらはするためにまじなひ為

名香をたき雄黄紙など又は神符なども
脇付るもよろし近頃家々に薪藪乙と
いふ字などを書しは群談採餘の部に記す
故事なり元の末つかた天下に疫気流
行し時浙江といふ渡し此あたりなるものあり
初はまづしき業とし或時老僧一人来り
そこにしの船頭をよびくだけるに今
此所淡黄なる装束したる老人来りて
て渡らんといへども此老人
を見て今天下にはやる疫鬼なりとし知

て渡らんと云ば此文字を見せよとて老僧は
行さまに見えずなりにけり船頭はあやしさのまゝ
に思ひけるはあんのごとく老人の来りて
く舟に乗よといふ船頭けがはざりをまち一バ
老人の翁大きにいかりて船頭を打擲せんと
ほどもやと思ひく彼文字のうきあらせ
勢けまで老人の翁見るやもとし息踏紙
と見えて近より船頭さてぞ疫神にま
ぎれなしと思ひ急に追のけまじべし老人
の翁は背よりちいさき錦をひろげ捨て

鄲げより兵衛今也間と色づゝさへ是非なく
香りず紙とり出りて引さゝんまでらいゝ紀
棺桶二百ほくを入り驚四近よ出りて始
おりり紙引りく彼文字を敷くにれしぱる
とるん此文字なりそぞその棺のつずほど
人を殺さしむ為なするべしといふすみさら
今の蘄蘄乙をそと紙用ひる之と記し紀

第二　蜘蛛の術法并王守乙ら事

一人のいゝくそのうく源氏お傳の名剱よ蜘切
と申流座によし太平記よ志るさりさしと

頼光の名ねらく土蜘蛛ほどのものにおそれ給ひき
なすべきハ心得ぐるく仇と向ひければ千人生
得しくいろく此事さとも隠し蜘蛛のち
いさき虫なれども智のおそれ深しき地なり
とそ文字にも虫偏に知の字をかきて又網に
ふまへる摘紙誅する義を顕すに蛛の字を
書見よ是誅の字紙なれども心なりそれ善
の蝶は其紙のごとく此紙をひ蛛の蝉の
妹をとめて露紙なれども皆智なれ
ところなれ何とて蜘蛛のみ智ある名には立

けるぞや況てに一寸の虫にも五分の魂なきにあらねど
虫ら糸とて蛇をとらへ蝋をとなむる自身の
人の身のうへなりそれ蜘蛛のこころく此もの
ひとへのりて事なきに網紙おちけ悪念
ものを己が餌にせむと多くめる事悪智の
なせる業なり此心紙長じて極まりたる
大蜘蛛ハ人をも害する事くだらつめるし此者
まわらぬほしの人をにくめるにや王たる己と云
凡人も蜘蛛の網かくる毎に杖にそ破り仇り
人その者を問ける天地の間あらる事ぐ

されば我が勤しく口腹のたすけとせるは
只鱗のみさかなのきたなきをなぐさむ地の命
をそこなひなむく我を害むける故にくみそく
かく命ずるとぞいへりとしのや

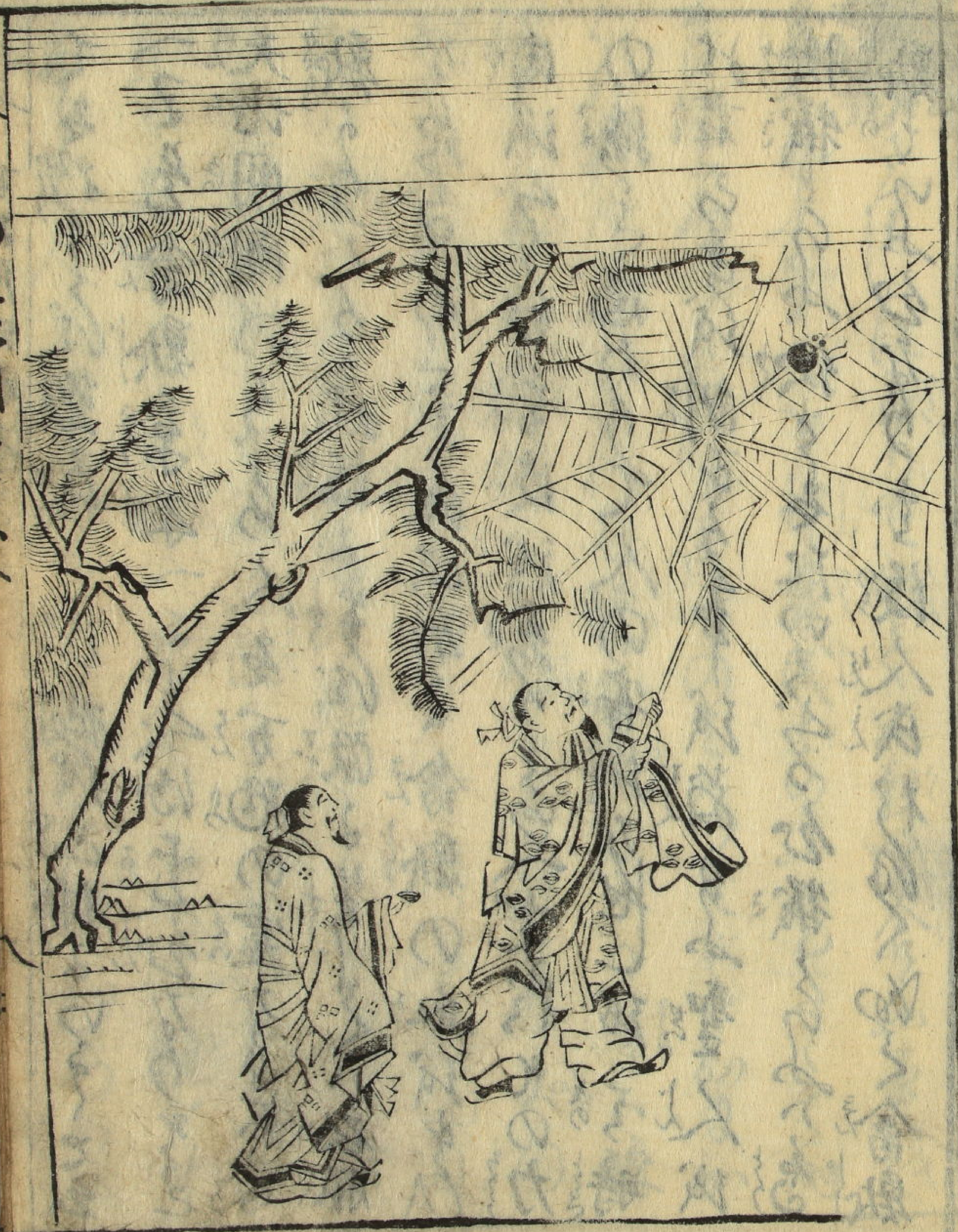
第三 殺生の縁付伏犠神農梁武帝の事

ある人の云好みて殺生をなせし者は悉皆果
報を受く悪を為し又其子孫にむくふ事世に
拙からり我しは故に仏家には五戒の第一
とし儒者には遠庖厨とやら辞にはし孔子
は釣して網せずとも先祖のまつりに犠とさし紀郷饗を

に生類を殺すこと又聖賢の掟なりされども
物には其品有り鳥獣は損ずれども旦足とせざる者
より釣り此説はとて同じ事なり先生言く云
是もつともさる論なりとされども又先仏家には
卒ホ利益をとらん所は人の親をも殺さんなる
王が親にしたがひ鳥獣又蟻蝨の事人の親殺
にもあつし此故に殺生戒は其第一つ
此虫蟻も殺さんはあらぬ此虫の殺す事
於親殺とはなおひとしきおとろへ
菩提をともらひ麻を三衣一鉢の偏り

けしからぬなる事也。分の事とハ是も又
きりやうにあらんや。是ハ六道輪廻する事ゆへ人畜
より畜生になり畜生より人間に生れ、
又一足の魚鳥たりとも是何ぞ過去生
の王が親なりし事も知るべからず、此故に先祖も
おくれさせ給ひし親の中何連か畜生に
生れまじき事をも知れりしに説や勿論人
おかしき物に同様を知るべしは是を乃
て釈氏の殺生をりつくる殺生戒と名付置て
行基の前にあらんる所にあらそふ犬也

けれど父をこそ母よりもなれと讃じても
此むなり儒家の説にハ天父と地母
といふハ是見識ある事也、釈氏にハかかる
親をもその中に本末の差別あり、本末を
いふハ先祖親を下の如く念比なる抱
なれバなにとぞそれにつきそて見守又その次ハ
親類眷属そのつぎハ朋友その次ハ知らぬ
世界の人とかぞふる禽獣草木なり是経の本末
なれバ天下の説とも親一人にかへさ
ず此親本末といふ此取ハ親へ念比に



ゆゑに心をきはめて兄弟親類朋友にも
どうしをあまねく世の他人へ及ぼし又
天が下の禽獣にもおよぼしてかく差別
ある人は禽獣のたぐひまでその仁心をかなじ
おほくはおのれを猶し殺さるるは礼義あり
ゆゑに孔子国君も取なけれど牛をかへさせ
天子海にあるうをを紀鳥獣もすみか宮
ぎれまさし數罟不入洿池とらへてもちのさき目
の網をすぐ魚の子をさがしく網をのがれ
をきつくひ草木もまた長ずるにあらん

てをおりしば鳥をらく野抱山林よりいでしと云
へり是禽獣草木へおよび悪心なりとぞ是
天地開闢のはじめ人は万物の霊なれバ
獣よりうまれ後に生じ次に生ずくハ衣服
なきゆへにさらば此禽獣の血ハ草ハ
肉はくらひ其皮は着るものとへぞ行その力
の強き物ありて人の害はなせし其時
此君子は制する事は殺すに聖人は
仕鑱といふ仕とをたいらぐ也鑱といふは鳥
獣といふものなりそ後人民おほく殺く禽獣

たらざるなしに耕て始て五穀を食ふ事は
其人は聖人を神農氏といふ是よりぞ附
是れよろしきにまかるのを何ぞなれバか
ありおもんやされば蛛は蝿をとり雀ハ蛛
をとり鳶ハ雀をとり鷹ハ鳶をとり大の
小きを制し強きが弱きにかつは天地自
然の勢なれバ人倫の物をとる事もなき
ゆくのおのくるしみにあひと既に殺さば乳養を
うるる人も万物の長なりゆへ彼親をして
無しき人をおかしむるものをむしろめぐ

儒の道ハ周公孔子の道なり然るに梁
の武帝ハ天子なから仏法を信じ殺生
戒をたもちて犠牲を殺さハ宗廟の牲ハ蔬
にて作り物とす人ミなその法を行ひしめバ
天下の民ハ鳥獣を取りて殺生戒を守
殿なれバ仏法を信ずる事かくのごとき
き敵と戦ふ数多ハ疎く仏法を信じて
大臣より下万民まで儒教をすて仏法を尊びし其後
果して国危ぶして台城にて飢死しぬ今
さへいへど仏法を信ずるにいかがあらんいふ

まハおしなべて上に偏りせしおくくなりける和朝
の命ながくして寿命を保ち官位をも類
あげてかぞふべからず又孔子の日のなかに日足
誉ハむかしより神人皇のはじめ頃まで絶乃
風気ありけく五穀もみのらずけりよりなし
めより日足の義を服するに及びに食事の
ことなる家是の風俗なりし中比まで孔
子の世の其物に拘泥を用ひしかども有人の為に
孔子尊くのごとく家に是まつりきてハ
天照大神と同座なる孔粗忽の散周にわ

かりて悪し國よりくる雲よまさぶふが家ん
なきハ向後男紀事なりきと附告おほし
然へきまより月ひぞとしかるず著聞集ふぬ
えとより四ツよく猫痴の類も譚よ急ぬるとハ
ちかひきく人の郷にちりき物なきハ穀さが御
風俗をきかの悪しとしへむや家國をぬ君子
倍しいふもひへなるぶさて禮義も多く穀
生帒ぬめりての名天地の始元物帒生る事
と好とするをそむけど何ぞ貌もなかりさ
ら拝み禱るい猟師などのなきぞ叶ぬ

ものなり其面く此泉色あるべき事にこそ
なべきと聞かれさ

或曰　龍宮城并山の神付張横渠の事

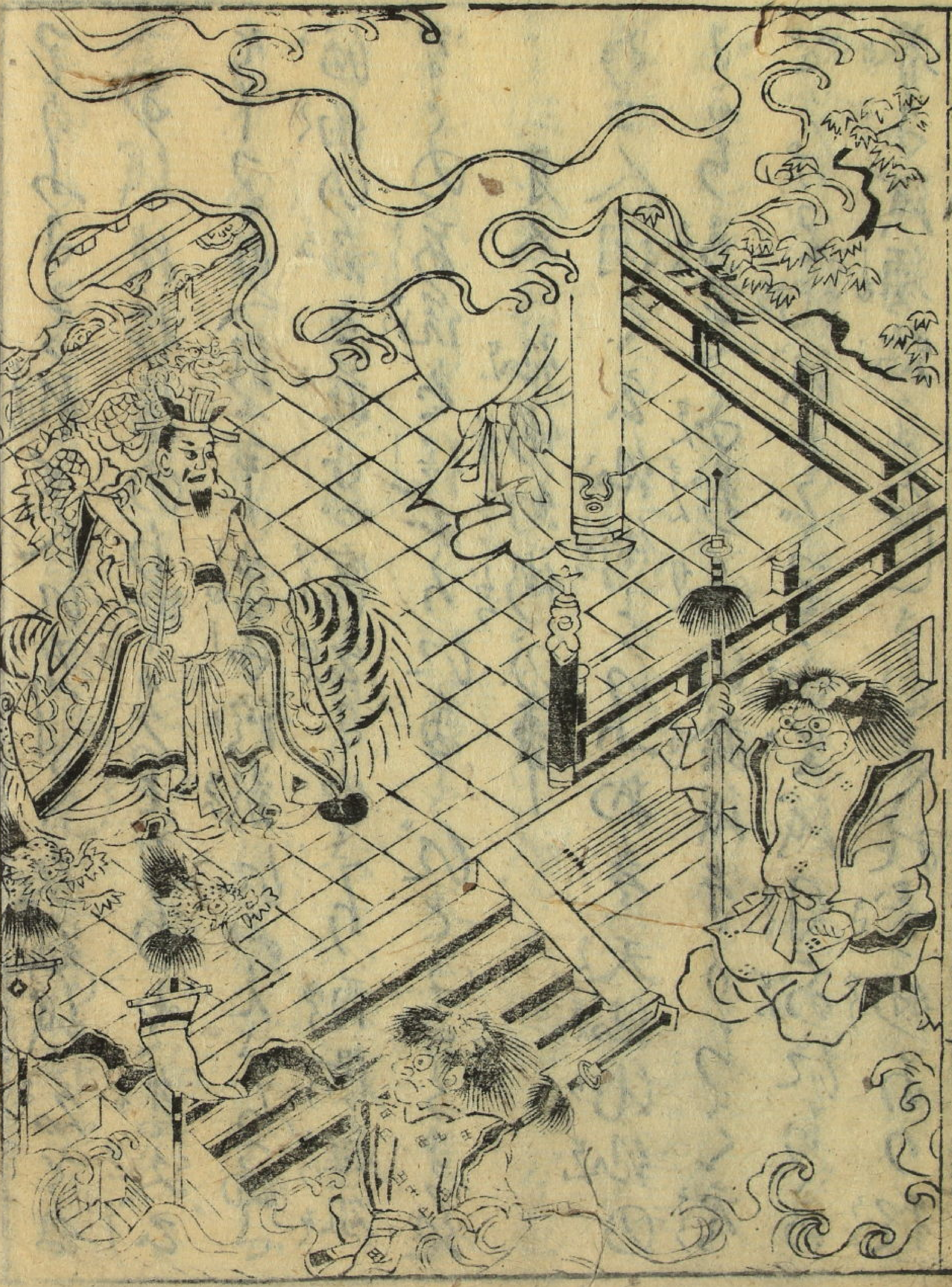
ある人問く　いはく蒼海の底に龍王ありて
世俗にもいなりたし又諸經にも多く見えた
り儀荘ある物がたりにも漁父もあるに
きこえ侍るが荒凉なく移らきはけも底よ
に河伯なるものも河の神此事にや又山の
とやらん山の神の事にて何かかの類いかにと
問きまハ先生答て云　山神并神龍王の類

何ほどもなし説とも色々有て其の類おほく
述べし所を手に経するものありぬべしおほく
人の色々変化を見じきにあらぬと云ふ世人とハ
見あし鄭玄が説の紙をさし海と人あれや
うにいひ伝ふるも実の事に化りなせ
ぬを見ひがみなり仏経に八大龍王なども
ある八部の流流によりて異類の感應
なる経とはけるなるべし儀をなす物語ハ
えよりさたなる事にあらぬ論じべき
にあらねどもそれハ張横渠先生海神を祭

また世人をとんにあしく夜叉鬼をも
へる説張横渠のあやまりなり也朱文公
もしまた其へる事朱子語類にみえたり清き
河伯の名も荘子が寓言に出たり酉陽雑俎
などの奇説も信ずるにたらねどもさる事も記

附又　仙術幻術の事

ある人問て云仙術とハ何物ぞ天仙地仙の
まちあそ千萬年の齢をたもちて長く寿
をうけ又地仙多く千里目をにらめ
芥子須弥をかくしさるこれ奇妙あり程



老子は元祖となせるとや。さて又幻術といふ
ものは魔術とひとしく多くの不思議をな
し剱をのミ火をふき身を自由にかくし
なぞすれはし承りひがいの多く人の迷ひぞや
うけあり俗術といひけれは先生こたへ
ていはく仙人の術は三代の盛なりし紀迄
戦国の末に起りて秦漢にさかんなり老
子は元祖とする事を子孫まで神仙不死也
いふ論わる紙とらく非理にけるへる説
なり秦の始皇徐福をつかはして不死のくすりを

とゞめしより此かた世々の帝王民家富貴にして
金銀ハいふに及ばず人をも殺すにいたるまでわろく
以て仙人の大なる者多く刑罰にあひ
ありその術ある事論ずるに及ばん
氣絶しけれバ雲にのぼる事も程子の説に
人を陸につきて生まをなすまじハ決してなく
理なし若山中に深く居て人事を
まじへず食欲をたち松葉をくらひなば
世の人の壽命よりも長生する事あり
との給へる事二程全書に見えたりかく

さもあらざる事を愚なる人の信じて深く
惑溺に陥り家業をもせめなやましく餓死にお
よぶ者あまたあれバ神仙の書に記していはく後に
羽化してそ登遐と記しなどせし奥ゆか
しき風にかなへり又是を刑せられておもく
死たる事ハたゞしき史官の書に記しをき記
されバ之を世に尸解なりと書たり尸
解とは此形をもぬぎ捨てのこして自由
にするといふとなり其説の謬る事甚
ぬ惣じて幻術の事ハ元天竺より起れる事

さくもとにくさる魔法(まはふ)のおそろしきおほくの
術(じゆつ)ありと記(しる)したれども仙術(せんじゆつ)よりおこりて是(これ)をさ
あさましき事にて一通(とほ)りの法(はふ)をあくみえ
ずたゞ其(その)鍛(たん)錬(れん)者といふも実(じつ)にのしかへあ
らぬ人の目(め)をのみおどろかせるなれば
他(さ)の事を皆(みな)是(これ)になじさせ仙術(せんざう)なく
も幻(げん)術(じゆつ)にしてもさぐよくぬるちがあるを
て人張わざむく時(じ)も必(かならず)害(がい)あり畢竟(ひつきやう)
実(じつ)は道(だう)にあらずとも八種(しゆ)おほくも身(み)を鉄
とくの人国(くに)を治(をさ)め役(よ)にあらず聖賢(せいけん)のい

はざる所(ところ)なれば何(なに)の用(よう)にか立(たつ)べき昔(むかし)その
人ありてもはやくもその術(じゆつ)の益(えき)なきを知(し)
りて彼(その)術(じゆつ)をばらふちと向(むか)ひ術(じゆつ)を殺(ころ)し其(その)霊(れい)
を滅(めつ)せり其(その)顔面(がんめん)の曲(わけ)紙されしが己(おのれ)ひとむけにつ
昔(むかし)ありければよく妖(えう)をかくせしとありされども
砂(まさ)紙もなきかれど其(その)足(あし)跡(あと)つきて日(ひ)影(かげ)なれば
あげられきのし記大(おほ)わざれども気(き)もうつ
やとなり是(これ)何(なん)ぞとげに益(えき)あるべからずや
まべて正(すぐ)に事の奇特(きどく)なしといふ事世(せ)話(わ)
なかるよく其(その)理(り)に付(つき)てよく得(え)るまじ

第六 夢枕がへりの事

ある人の云、かんたんの枕といふも夢に御座候が、御処さふらぬやと問けるに先生まうさく、いはく、山谷が蓋世成功黍一炊といふ詩の注に異聞録を引て云、道士仙術の事なる故、儒者には仏道のやうにおもへり。とにかく其術なきにもあらず。さて夢といふ枕して世のさまぐの御見給はさる人の寝入たる時は五臓六腑の虚をさぐるゆゑ、何事も其気に応といへど

本心の主人を縁として臓に思ふ念の事あるまで起る後わかひ出まく是夢といふなりされど其夢にさまぐの品あり、たとへば心の火盛なる人は火の夢を見、腎の水虚したる人は水の夢をなし、又は病夢といふ又其ものゝ夢に事につきて見る事ありあるは足に線をくび横に寝る時は其足を人に取られたる夢をみ、又思ふ事ありて是を心にかけ夢の事をなし又夢に見る事を寝て思へば夢を見る

苦労は思ひて苦労を夢にもみるなり
よつて其事はみるを思夢といふ孔子
れいそゆめに見る周公を見えずと仰せら
れしも此類なり又瑞夢といふは丁固が
松の夢王濬が三刀の夢は此類よき事あ
らんとき必ず前よりその気の相感じて
みる夢はいふなり彼詩経にある夢あり
熊羆をゆめ虺蛇を見ては女子生まれ弓を見ては
男子生るの類なりこれらはくはしく記す
一篇の内二章の類なり又わきまへ夢のみえ方く

かなしびを継の事ともを理又かくのおとし
人の心を非明にあらはしものなりまで自然と
善悪をあらはすなるべし されども
起るべき事は無き人には変ならず他念お
はさる事をもってとも寝入たる
と記を却て心の働きとなる所也 又
端夢は思慮より心を病夢はおほく
て安座の後より得意の風気邪を車に来
あるる乱定気おほしてある是夢の夢
はなくそのまゝ事無なしと昼夢も記

第七 而慍齋化物がたりの事

一人のいはく昔より物語よく聞はべれど
化物を作りたるといふ事ばかりは
何とぞ見はやと問ければ先生云々
御返事に先生答給ふ 其事はかなし
しかるに多く物おほく見えし事は
世に多くその事をわすれて今は
世の儒学をしたり此乱の人もし文字
を読む人は猥りに衣服をかへ安
からむとするゆへ物の理より人おのが
ざる我の学問によりて利欲は常の人

は十信して口にはゑかう事にもひたせよとこそ実
に律義無縁ばかりもなき比は俗儒腐儒などいふ
て儒者の化物なり身には三衣袈裟着し口
には五戒をとけども誠の心は少しばかりもお
ぼえずして破戒無慚の坊主かうまたお家のだ
らく売僧なるべしやその外世俗のまぎれ
も傾城などいふ物の仕かたを見るに思ふね
がひに宗旨の髪をきり爪をそめてへは
耳にきくも女房のぶとくおとろさふかさの
ごとく人をたぶらかし金銀をむさぼる是

女のばけ物なり智恵は又かぶきざむらひの化物
わかしゆより男色の色をもむかしよりいましめ
ことども此比はいよいよ若道に盛となり
ておのがよりまつよろこびをも無志にふるまふく
狂俊どひやまされきぬ女の化物なるべきや
天平判などはとのゐかたぐい化物一文
ふ無の君にくく人のおさ銭浴し利刀
まり薄さえりつさにくく人の貪富役論に
泳ぎいかなるや物かや化物の影後
とくへ本のうせ世はまじきものさま紀

第八　而慍斎の事　并　此草紙の外題の事

一座の人の云ことを聞しに源氏及び萬葉などいづれ清少納言伊勢物語とかきしもの云く此草紙乃作者ハいかにも見ども聞ず遠ちかき所當の御座ハ先生にて読を前ゆけば何事ば紙に人見とも楯板にかゝりしなどいへる紙を是の事の御噂どもあつく書物読むの人おほけれ此外に聞え侍るが此ら人無さぞ清胸中をもしく萬の事に付てもいさゝか紙

ことゆきまゝしき猶よかくに斎号紙而慍也清付なさまして何事ぞや也文人で先生あらくは云余が斎号ハ論語の学而の篇に人不知而不慍不亦君子乎とのふを用ひとはいはれ人あり身によりて物毎はなさる才徳ありとても見よりうる人に嘉べきさまかなり得て人知がたしそ発斗いさゝか紙作しなし前おげ聞むりしむ時文堂附ともさずかる行ひつきのこと思へ君子なられやとの事かされど其の

君子にあらざれば知る事なきにしもあらざりたるを
ちかきころは才芸ある人こそは知りたるを恒
何がし某へかく斎号を付しけるなりしかば
今文おこりし事となりて近年よりさきより
古し記にふるくてあるのも書籍あるに往至
けるは経史子集のおほくなれば眼をさ
らし上伏犠より下明清におよぶまで世
の治乱政の得失人の賢否事の変易
をもしらずといふ事なく医術卜筮
種樹相牛の事にいたるまで中にも禅学を

好みしゆゑに太極経又百韻のまくらくしきを
さゝれ石といひし論語の義論語師の注
録にほぐ唐集韻目あるいは内の名に注
香山の故事にまけのぼりにけて等
うたはなつまでも傾く連歌俳諧の小技
まうくひぐげんとし誠に昌黎の言ふおと
き頭をふるに会わずべきものなくさせること
なれく呂さびしたれに打まうけく四書評論
暦代異考源氏家傳抄百人一首新抄伊勢
物語玄宗抄なと増補纂抱印をなす丈

[seal]

紀抄前本草増補なと綴の称などうのゝ人
小さうきたくらがうちいふい仕侍りなど
わらべさへ此紙人の覗れはまうけて持よ
ちりがくしもあり又窓よのあとしもあり
ひくしく世にもこのはまへらまほし時にも知
らまれ葉本と称す杦果むきは何ぞ両脳
なりさるへきや業まこと云くと紙の礼桐
がうりせ歌くりさ付なまそて後よ夜行い
さきむ外題を何とも色をかか此書紙
に編ど物よ古今の不思議あらまうかれ

ときえを猶識冷閲たの事及東此書紙に
恥ざるべしとのひしかバ先生いへらく是はもと
題のなけしと云付なれど百物語評判と名
付ぬるはいかし此の名の覚にあるまじとも是
古人の名ま叶ひ侍りむかし張横渠先生東
西の窓の銘と云く砭愚訂頑と名付ぬるを
しかゞ程子見とまりもくたゞ東西の銘と
号せよと教へなひきされば此書紙もさ毎
く此名を侍るべけれど只と徒の害事に
あきぐひく名付ぬるかしとりされて眠る

初版奥附
貞享丙寅季夏中旬

隠れたまひけるぞ名匠おしまぬ者のなき
先生寛文壬子のとし六月廿七日に四十二
歳にして果てたまひぬ是によりて此書
てせざいかなるこの事か伝はんは残多く
侍りけりや先生甥子平山園氏諱是元隣
字者徳甫又號は勢州山田の人なり是
も其趣の拙なりなれバかきつけ侍る

宝暦又亥春新板

百物語評判巻之五終

京寺町松原下ル町
梅村三郎兵衛